

2015年11月8日 MJCC 主日礼拝メッセージ（要約） 柏倉秀吉師

聖書：創世記 1:9-31

タイトル：「見よ。それは非常に良かった。」

---

創世記 1:9-31 は創造の御業の第 3 日から第 6 日までのところである。前回までに創造の御業の第一日、第二日を確認してきた。

第一日で「はじめをはじめられた神」が、この「闇と大水」に覆われていた原始の世界に、「光よあれ。」と、御言葉により「光」を創造した。第二日には「大水」を「上」と「下」とに分けられた。

さて、この「光」とは、「全てを明らかにするもの」である。言い換えれば、隠れたところが一つも無いように、すべてのものが神の御前で白日の下にさらされて、創造の御業が行われた。ということであり、神は「光」を創造することにより、神ご自身のためというよりは「人間」のために、御業を初めから明らかに示されたのである。

全てがさらけ出され、神の前にはすべてがお見通しなのである。

また第二日に「大水」を上下に分け「大空」を創造された時に、それを見て「良し」とは言わず、あえて第三日にその「言葉」を二度も記していた。当時の生物にとって「上下の大水」とは無くてはならない必要なものであり、神からの「祝福」であった。しかし、その後人が罪を犯したことにより、あのノアの洪水の出来事にみるように、被造物への「裁き」へと変えられた。神は「上（下）の水」という特別な「祝福」の内を歩み続けられる自由を第二日目に私たちに与えていた。しかし人が「罪」の内を歩むなら、その「祝福」が「裁き」へと変えられていくこともまた、神を信じ生きるという信仰の自由の中に、委ねられているのだろう。おそらくこの創造の第二日に、あえて「良し」とされたという言葉が記されていないのは、こうした意味もあるのかもしれない。神の「祝福」と「厳しさ」を確認することが出来た。

さて、第三日の 9-10v で神は「海」と「陸地」を分けられた。それまで第二日に記されていなかった「良しとされた。」という言葉が出てくる。不思議なのは、神は第二日目をここまでとして終了しても良かったはずだが、あえてそれをしなかった。

なぜか。

その理由は神には確かな「計画」があるため。という以外にないだろう。神には常に計画がある。しかし、私達はそのことを多くの場合、知ることが出来ない。それゆえ私達には「なぜ?」「どうして?」という思いが出てくる。またその時は分からないことでも、神が丁度良い時に、私達に答えてくださることもあるが、待てないのが私たち人間でもある。神には常に「計画」があるということを「信頼」することが出来れば、どんな状況の中でも、神の見えざるご計画を待ち望むことが出来るのだろう。

なぜなら神の計画は、中途半端なものではなく、完全で完璧な計画であるからだ。また神はそれをことごとく成就することが出来る唯一のお方である。創造の御業の第二日と第三日のこの出来事から、教えられる。

次の 11-13v の後半分節では、神が「海」と「陸地」とに分けられたその「陸地」に、あらゆる植物、草、果樹も含めたすべての種類が与えられ、芽を出し、実を实らせたことが記されている。実に順序良く、秩序を持って記されている。こうして原始の地球は、第三日までに、生命が維持できるための「枠組み」が出来上がったのである。そして、「神はそれを見て、「良し」とされた」のである。

続く 14-18v

ここで「昼と夜とを区別せよ。」と出てくるが、先に造られた「光」が 14v 以降の第四日に来て、具体的に「大空で光る太陽、月、星」として整えられたのである。

20v からの第五日の創造の御業では水には生き物が群がり、鳥が地の上、天の大空を飛ぶようにされた。神は、第二日に「大空」を作り、「上下の水」に分けられ、第五日に「生き物が群がり、鳥が飛ぶように」された。第三日に「海」と「陸地」に分け、あらゆる植物を地の上に芽生えさせた神は、第六日に「家畜、はうもの、野の獣などの地上の生き物」を創造された。丁度、第一日と第四日、第二日と第五日、第三日と第六日というように、神はそれぞれの日毎に、さらに次のご計画を持って、創造の御業を成されたのである。

大きな枠組みから詳細へと創造の御業を進められたのである。

このクライマックスが、何より 26v 「さあ、人を造ろう」である。

この言葉はそれまでとは明らかに違い、神ご自身の意思を表明している。これまでの創造の御業の六日間で、まさに人を創造するために備えてきた六日間であると言える。すなわち神は私たち人間に対して、これ以上ないほどの素晴らしい環境を整えてくださったのである。何たる神の愛であろうか！創造の御業から、私達は神の祝福、また神の熱心、そして神の愛と神の用意周到な完璧なご計画を持って、創造の御業の初めから特別な存在として、この世に生まれ、生かされている存在なのである。

これは、この世の「生まれてこなければ良かった」という不幸な言葉を一扫するのである。神の愛と計画が、私達一人一人に今も注がれているということを中心に感謝したい。

26-27v 「われわれのかたしとして、我々に似せて・・・」とある。ここで神はご自身のことを複数であることを示している。

ある意味神は「独裁」ではないということである。そして言い換えれば、全ての内容を良く「協議」「吟味」しているということでもあろう。またそれは常に「一致」し、立てた「計画」全てにおいて責任をもって確実に完璧に最後まで遂行しているお方である。

「われわれの形(また似せて)」というのは、こうした性質を私たち人間も備えているということである。

28v で「生き物を支配するように」と記されている。

「支配」という言葉は非常に強い言葉だが、「統治」または「管理」という言葉に言い換えることが出来る。

人間は神と共にこの世の被造物を「支配、統治、管理」する責任がある。それは独裁ではない。神との親密な関係の中で神を喜びつつ、人は神の栄光をあらわすために神に仕えるのである。そうして築かれるべき健全な社会を築くことが私達には求められている。そのための支配であり、統治であり、管理なのである。

しかし残念ながら今日、私達はその責任をあまり見ることが出来ない。人々は常に自分のことが優先され、神の栄光をあらわすための

健全な社会を築くよりは、お金、仕事、欲の奴隷となっている。

それゆえ私たちは祈らなければならない。教会のため、自分自身のため、子供達、家族、親族、そして友のため、また全世界のために祈るならどんなに祈っても足りない程である。

この創世記 1 章には、この神の愛が創造の初めから実に溢れている！そのことを深く味わい知ることが出来る。私達はこの神に今も愛されているということを中心に感謝し、見つめる者でありたい。